

法科大学院「適性試験」

当校講師による
本年度試験傾向
分析コメント

大学入試センター 2004年6月27日(日)実施試験

総 評 ● ● ●

この試験の2週間前に行われた日弁連法務研究財団主催の試験では、昨年度に比べて、奇を衒った難問をなくしその分、作業量を増やして難易度を上げてきた。今年度の大学入試センター主催の適性試験にも、同じ傾向が当てはまると言えるだろう。2年目ということもあり、受験生はそれなりの訓練を積んで臨んだであろうから、もし昨年度と同程度の質・量の試験では、かなりの高得点での得点分布になったことは想像に難くない。しかし、この試験は「法曹としての適性を測る試験」のほずで、単に作業量を増やし「事務処理の適性」を測定するスピード検査ではなかったはずである。

昨年度の試験に関しては、設問ごとの正答率は公表されていないが、おそらくは正答率の低かった(逆に不自然に高すぎた)と思われる問題や、あるいは内容に疑義があったような問題(内容ばかりではなく形式も含め)は、今回の出題からは慎重に遠ざけられている。その意味においては、今年度の試験問題は細かな配慮のもと、練りに練って作りこまれた“努力の産物”と言えるだろう。しかし、胸を張って「粒揃いの良問」という絶賛はできない。それは、外面の立派さに比べて、内容が希薄だからである。強いて例えるなら、まるで「インスタントラーメンに豪華なトッピングを散りばめたような違和感」を覚える。後味というか、解答し終わった時の充実感がないのだ。良問には、出来たか・出来なかったかにかかわらず、挑戦したあとには思わずこちらが「解かせてもらってありがとう」と言いたくなるような印象が残るものだ。しかし、残念ながら今年度の適性試験には、言いようのない疲労感だけが残らなかった。

第1部では、自然科学に題材をとった問題が相変わらず出題されてはいるものの、文系出身者が一読して「ウツ」と目を背けたくなるような「理科臭さ」はかなりかき消されている。これは、昨年度の試験で第1部だけ理系出身者の平均点が高かったことへの反省を踏まえてのことだろう。「遺伝子」や「ウソつき問題」は、内容が平易とはいえ事前に触れておいた受験生はきっとホッと安堵したことに違いない。逆に「形式論理」に関する出題が少なく、がっかりした受験生も少なからずいたはずだ。後半に、これでもかこれでもかと登場する公務員試験の「判断推理」に類した(と言うより、焼き直した?)問題は、着眼点を間違えると(あるいは着眼点そのものが見つからないと)、試行錯誤を余儀なくされ“樹海”に迷い込んだ心持ちになること必至だが、訓練次第では、いわゆる“秒殺”できた問題ばかりであった。ここで時間をロスしてしまうと、「解き終わらなかった」という取り返しがつかない悲劇に見舞われることになる。

第2部では、比較的身近な読みやすい文章が採られていることもあって、全体をとおして取り組みやすい印象を受けた。しかし、あくまでこの感想は第1部で半ば“いじめられた”後の相対的なものであって、昨年度と比較すると難化していることに変わりはない。そして、すんなりと読み進められた反面、レトリックが似たり寄ったりになってしまっていて、試験の帰りに「この筆者の本でも読んでみようかな?」と殊勝な気持ちにさせてくれる引用は残念ながらなかった(すでに、読んでいた本があったことも事実)。特筆すべきは、文章整序の問題で2問ともすべての文章の断片を羅列させる解答形式(当然のことながら、完全解答にて配点される問題)となっていたことである。問題冊子の表紙に「解答数」が出ているのだが、その多さ(45問)に一瞬、ヒヤリとさせられた。いくつかの問題は、まるで第1部を思わせる内容で、解答しながら何度も第1部の問題かと錯覚してしまったほどである。

結果については、怠りなく準備し十分な訓練を繰り返してきた受験生にとっては、他者に差をつける絶好の機会ではなかったか。しかし、入念な準備をしていても、本番の雰囲気のにまれ時間との戦いに敗れた者には過酷な結果が待っていることが予想される。激減した受験生がどの層に当たるのかの明確なデータがないので(成績不振者が辞退したのか、上位者が現行司法試験に流れたのか)、早計な判断は危険だと思う。平均点云々よりも、どのような得点分布をしているのか、さらに言えば法学既修者・未修者の希望区分ごと、志望大学ごとで自分がどんな位置にいるのかが重要になってくるだろう。ともあれ、済んでしまったことに気を揉むのは時間の無駄、頭と体の疲れが取れたら、先を見据えてそれぞれの道を一步先に踏み出すべきである。

最後に、捲土重来を期した受講生のために、あるいは次回初めて受験する受験生のために、来年度に向けての対策を講じておく。是非はともかく、“熟考型”はあまり歓迎されていないようであるから、短時間でテキパキと処理する力を「毎日」少しずつ養っておくべきである。第1部のような問題は、すべてではないが練習量に左右される部分が大きいので、とくに苦手意識を自覚しそれに苛まれている人は「今日から」やるしかない。今年度は出題がなかったとは言え、命題の逆・裏・対偶といった論理学の基礎と、常連となった統計に関する誤謬は必ず押さえておかななくてはならない。総じて、短時間で膨大な量の活字を正確に読みこなす力が要求されるので、各人各様、この「時間内に処理する事務的能力」を訓練しておくべきだろう。さしあたっては、時間を区切った反復練習を繰り返すことが有効なのではないだろうか。

第1部 ● ● 推論・分析力

昨年度の大学入試センター本試験および追試験の第1部と比べて、大幅に難化し、出題傾向も変化した。まず、昨年度の本試験が大問14・解答数21だったのに対し、今回は大問10・解答数21だった。大問の数は減ったのだが、設定の複雑な問題がいくつかあり、その枝問が増えている(第3・4・7・10問)。これらの問題では、まず条件を理解するのに手間取り、さらに作業量も増えていて時間がかかってしまう。問題設定がのみ込めず、設問に手が着かなかった受験生もいるのではないか。時間不足で第10問までたどり着けなかった者もいただろう。とくに、第4問は難問だった。古くからあるパズル問題の改作だが、場合分けをしきちんと証明しようとするとかなり時間がかかる。後回しにすべき問題だ。第3問は遺伝子の組合せを題材にしている問題で、当校の模擬試験でも出題している。遺伝子型の出現確率を扱った問題だったので、参考になったと思う。ただし、この第3問の問題形式は高校生物で学習する内容そのままであり、履修者にとっては簡単はずだ。その点、出題にもう少し配慮があていだろう。

第1部の印象だが、第1・2・6・7問など昨年と同じ傾向の問題もあったが、第5・8・9・10問が公務員試験の「判断推理」に近い問題で、全体的に「公務員試験寄り」の適性試験になった。難度の高い問題が多かったことも考え合わせると、「法科大学院における教育に不可欠な基礎学力」(『適性試験実施要項』より)を判定する試験として、この方向性でいいのだろうかとの疑念がわく。7月11日に実施される今年の追試験も見なければ判断できないが、日弁連法務研究財団との考え方の違いが大きくなってくるのかもしれない。

受験者数が減少したことと、昨年度の問題を研究して対策を立てた受験生がいることで、昨年と条件が違いため推測でしかないが、平均点はかなり下がるだろう。試験対策を十分に行った者とそうでない者、あるいは得意・不得意の差が大きい試験になったが、8割以上の高得点者はそう多くはないはずだ。「できなかった」と受験生も落ち込む必要はない。気持ちを切り替えて、小論文や法律専門科目の試験対策に進んでほしい。

第2部 ● ● 読解・表現力

第2部「読解・表現力」では、昨年度に行われた2度の試験(2003年8月の本試験、11月の追試験)と同様、分野と叙述形式の異なる文章が多数出題され、基本的な文章読解能力、迅速な思考転換の能力が試された。設問形式にも大きな変化はなく、空欄に補充する問題、下線部に関する問題、文章整序の問題などが中心であった。設問総数は減少したが、問題文の数が10から12に増えたために、制限時間内にすべての設問に答えるのは、かなりたいへんではなかったかと推察される。「日弁連法務研究財団の適性試験と比べると、大学入試センターの適性試験2部は時間的に余裕がある」という、従来の認識は改めねばならないだろう。文章の難易度は、おおむねこれまでと同じレベルであると言えるが、紛らわしい選択肢を含む設問もあり、以前の試験より難しいと感じた受験者も少なくないであろう。

具体的に見てみると、第1問は空欄に語と文章を補充する問題、第2問は標準的な文章整序の問題である。第3問は対話篇中の空欄に適切な語を補充し、結論を把握する問題。第4問も同じ対話形式の文章だが、そこで説明されている内容と合致しない選択肢を選ぶ。第5問では空欄補充問題に加え、小見出しや下線部の意味内容、与えられた文章の構成が問われる。第6問では(部分的)記述内容と、特定の段落が文章全体の中でどのような機能を果たしているかが問われる。第7問は再び文章整序の問題であり、第2問と同様、標準的なレベルの問題である。第8問では下線部の意味内容と筆者の中心的主張が問われる。この第8問は、問題文自体はとくに難解ではないが、どの設問にも紛らわしい選択肢が含まれており、今回の試験ではもっとも解答しにくい問題だったのではないだろうか。第9問では記述内容の把握と、下線部の内容を正しく表わす図の選択が課せられる。第10問は空欄補充と下線部の内容を具体的に表わす対象を選ぶ問題。第11問は下線部の意味内容および筆者の中心的主張を問う問題であり、第12問は空欄補充と下線部の理由を問う問題である。

予想されたこととは言え、やはり問題文の多様性が印象的であった。苦手な分野や叙述形式があっても、正確かつ迅速な解答は望めない。多様なジャンルの文章に触れ、「好き嫌い」をなくしておくことが大事だということが改めて確認された試験であったと言えるだろう。

以 上